

折口信夫の古代研究

2022年12月11日開催の21世紀ライフスタイルの会で取り上げるテーマに関する資料を事前に提出します。

私の好きなNHKの番組に「100分de名著」があります。10月は「古代研究・折口信夫」でした。ゲスト解説者は国文学者、國學院大學教授の上野誠さんでした。書店にてNHKテキストが販売されるので必ず購入しています。

今回、十分な時間もありませんので、私の興味や気付きを中心に話します。

1) なぜ、『折口信夫（おりぐちしのぶ）の古代研究』をテーマとして取り上げたか？

その理由は、テキスト中に明記されておりますので参照します。

(P4より)

今、我々が『古代研究』を読む意義とは何でしょうか？折口は、その生涯において、日清戦争、日露戦争、第二次世界大戦という三つの戦争を生き抜きました。特に第二次大戦の敗北を受けて、日本人が自信を失ってしまったこと、その結果起こるかもしれない「日本文化の永遠の敗北」を危惧していました。日本語廃止論までであった時代です。各地で紛争の絶えない現代においても、あるいはグローバル化社会を生き抜く上でも、他国の文化を理解し尊重することが必要です。そのためには、まず足元にある自身の文化を理解することが大事です。『古代研究』はその格好のテキストとなるはずで

2) 折口信夫とはどのような経歴の人物か？

(P5より)

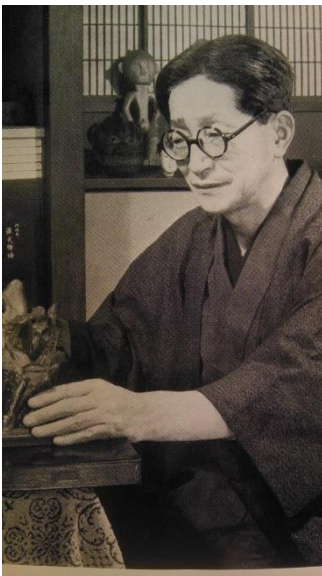
折口は、1887年(明治20)大阪府に生まれ、1953年(昭和28)に亡くなるまでに、国文学者、民俗学者として、『古代研究』を始めとする数々の著作を世に送り出しました。のみならず、「釈迢空(しゃくちょうくう)」名で歌人としても活躍。

もっと詳細な情報を知りたい方は、“折口信夫 wikipedia”でグーグル検索することをお勧めします。

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%8A%98%E5%8F%A3%E4%BF%A1%E5%A4%AB>

追加情報として國學院大學博物館を訪問することもお勧めします。

<http://museum.kokugakuin.ac.jp/>



國學院大學博物館には折口信夫の箱根の書齋が移築、展示されています。渋谷駅から徒歩約15分です。入場料は無料です。私は10月に一度、訪問しました。そこで國學院大學の来歴など新たな発見がありました。「知って、行って、観て、会って」の精神で、実際に行動すると視野が広がります。

3) 折口信夫の代表的な業績『古代研究』とはどんなものか？

(P5 より)

『古代研究』は、国文学篇第一巻、民俗学篇二巻の二部三巻で構成されていて、日本における宗教、祭り、文学、芸能、生活習慣などなど、その内容は複雑かつ多岐にわたります。ゆえに、読み通すことが困難な、難解な書として知られています。

折口のいう「古代」という言葉については、少し説明をしておいた方がいいかもしれません。一般的に古代といえ、中世・近世・近代へと続く歴史区分であり、日本史においては奈良時代、平安時代付近を指します。しかし、折口にとっては、それは古代という言葉の一面でしかありませんでした。

折口にとっての「古代」は、歴史区分だけではなく、あるものが生まれてくる「瞬間」を指す言葉だったのです。つまり、「時間」を超えた概念だった。言い換えれば、あらゆるものについての根源、のような捉え方だったといえるでしょう。

P14 から P15 に古代研究三巻の目次一覧があります。それは、まるで大きな山に分け入り、木々を観察し、自然界の生成・発展を探求するように見えます。折口はこの研究で日本の宗教、祭り、芸能、文化などの根源（ルーツ）を探索しています。

4) 「他界」からやって来る「まれびと」の発見、「おもてなし」により日本文化は始まった。

(P16、P17 より)

他界とは、平たく言えば、人が生きてるうちには行くことができない永遠の場所のことです。キリスト教では「天国」、仏教の浄土教では「極楽」、古代の書物「古事記」や「日本書紀」においては「常世の国」のことです。常世の国とは永遠の国ということです。記紀神話では、地下に「根の国」や「黄泉の国」という他界も存在します。

(P21 より)

「まれびと」とは、その語の構成を見れば明らかなように「稀＋人」であり、「稀に来訪する人＝珍客」の意として捉えることができます。しかし折口は、これだけでは不十分だと考えていました。

(中略)

「ひと」という語は、「人間」という意味に固定される以前は、「神」や「継承者」という意味も持っていました。まれびと、つまり珍しい客の中には、「神」のような存在もいたのだ、というのが折口の主張です。

(P22 より)

「神のやって来る場所＝他界」であると、折口は考えていたのです。他界へのあこがれ、他界からやって来るまれびと、そして、そのまれびとをどうやってもてなすか。そのもてなし方から、さまざまな文化や習慣、行事が生まれ、それらが、他界へのあこがれをさらに深めていく。

(中略)

結論から言うと、折口の考えるまれびとは、神でもあり、人でもある。神と人とを厳格に分けるのは一神教的な考え方です。

折口は、日本の宗教、文化、生活習慣、行事の根源（ルーツ）は「まれびと」を「もてなす」ところから発生していると考えました。それが歌舞伎、華道、茶道、国文学、各種演芸などに発展するのです。

文責 浅井博 2022. 12. 09